

定森 秀夫（考古学）

朝鮮三国時代陶質土器と日本への波及

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、朝鮮半島三国時代の陶質土器の土器編年を明らかにしながら、その時空的な変化を歴史的に解釈したものである。考古学の基本尺度である土器編年を、陶質土器の編年として初めて体系化した業績としてまず評価することができる。それは、文献に見られる大加耶、小加耶、阿羅加耶、金官加耶、新羅、百済に及ぶものであり、それぞれ陶質土器の高霊タイプ、固城タイプ、咸安タイプ、洛東江河口タイプ、新羅土器、百済土器に対応する。陶質土器における土器様式の時空的な広がりや縮小から、古代国家の領域とその興亡の歴史を振り返っている。例えば金官加耶の場合、4世紀には金海地域にその政治的中心があったものから、5世紀には釜山地域にその中心が移るとともに、いち早く新羅の影響下に入ることを明らかにした。但し、このような土器様式の変化が当時の政治領域にそのまま対応するものであるかどうかは、方法論的な議論を詰める必要がある。しかし、例えば大加耶滅亡後には、その地域の土器様式が新羅土器様式に一変するような劇的な変化が見られるように、政治領域と土器様式との対応が明確である場合も存在している。そうした立場に立ってみた場合、大加耶滅亡後の東海市湫岩洞古墳群のように、新羅土器様式の中に大加耶土器様式が残存しているところから、大加耶滅亡後に大加耶の民が湫岩洞付近に移住させられたことを想定する。このように、本論文は単なる陶質土器の時空的な基本編年を明らかにしただけではなく、朝鮮三国の古代国家の歴史的動向まで解釈したところに論文としての秀逸さを見出すことができる。

また、このような朝鮮三国の陶質土器の時空的な位置づけを基に、日本列島の古墳時代に流入した陶質土器の生産地とその年代、さらには日本列島での出土地との関係を検討している。まずは、日本列島全体で網羅的に資料を集めた点を評価しなければならない。さらに、その分析によれば、5世紀代を中心に瀬戸内に高霊タイプの陶質土器の出土が集中し、大加耶系渡来人の流入とともに、対外交渉としてのヤマト政権との関係が強いものと想定されている。一方、6世紀前半には西日本各地に高霊タイプの陶質土器が認められ、ヤマト政権との関わり以外に地方豪族の独自の通行ルートが存在を指摘している。さらに、6世紀中葉には東日本の日本海側にまで分布することから、大加耶の滅亡による渡来人の亡命の可能性を指摘している。最後にこうした陶質土器の流入を背景として、日本での陶質系土器の在地生産品である須恵器の成立問題を扱っている。初期須恵器は当初、陶邑の一元生産ではなく、加耶系陶質土器の多元的な生産であった可能性が指摘できる。とともに、陶邑は当初、洛東江河口地域の渡来工人が、そして後には馬韓の渡来工人の関与によって組織的な生産が始まったことを示している。

以上のように、本論文は、陶質土器の編年に始まり、陶質土器の日本列島への流入、さらには日本の須恵器生産の開始までを扱った、これまでにない広範でかつ実証的な研究であると言える。したがって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。